

幼児の道徳判断における意図情報の利用

鈴木 亜由美

(受付 2006 年 10 月 11 日)

1. はじめに

人は他者の行為を解釈する手がかりとして、行為の背後にある相手の意図を探ろうとする。他者の行動の善悪を判断する際には、そのような意図の解釈は重要であり、法律においても事件や事故が故意になされたかどうかは行為者の責任の重さを考慮する上で重要な手がかりとなる（外山，2005）。

また、子どもは日常生活において様々な対人葛藤場面に遭遇する。そのようなときに、相手の行為の意図を考慮して対応すること、つまりたとえ相手から損害を被ったとしてもそれが過失であれば許すが、故意に危害を加えられたならば抗議する、というように相手の意図に応じて柔軟に対応することは重要な社会的スキルの一側面である。児童期において年齢とともに道徳判断の手がかりとして意図情報が用いられるようになることがピアジェをはじめとして様々な研究者によって示されている。さらに、近年これらの研究は幼児期の子どもを対象に行われるようになってきた。

そこで、本論文では、そのように道徳判断において意図情報を考慮するようになる発達プロセスを先行研究のレビューをもとに概観し、幼児の道徳判断において意図を考慮する能力に焦点を当てて考察する。

2. 道徳判断における意図情報の利用に関する先行研究

道徳判断における意図や動機の影響という問題に関して先駆的な研究をしたのがピアジェ（Piaget, 1932）である。ピアジェは、次のような例話を using 子どもの道徳判断の発達段階を明らかにしようとした。

A. ジャンという小さな男の子が部屋の中にいました。ジャンは食事によばれたので、食堂へ入っていきこうとしました。ところが扉の向こう側にあった椅子の上にはお盆が置いてあって、そのお盆にはコップが15個のせてありました。ジャンはその扉の向こうにそんなものがあるとは知らないで扉を開けたので、コップは15個ともみんなわれてしまいました。

B. アンリという小さな男の子がいました。ある日、お母さんの留守に戸棚の中のジャムを食べようとしてしました。そこで椅子の上ののぼって腕をのばしましたが、高すぎてジャムまで手が届きません。無理に取ろうとしたとき、そばにあった1個のコップにさわったので、そのコップは落ちてわれました。

A は中立的な動機から大きな被害をもたらした場合であり、B はよくない動機から生じたが小さな被害しかもたらさなかった場合である。ピアジェは、子どもにこれらの2つの例話を聞かせた後、A と B のどちらがより悪いのか、またなぜそう考えたのかを述べさせ、子どもの反応を結果として生じた被害の大きさにより注目して A をより悪いとみなす客観的責任性の段階と、意図や動機を考慮して B をより悪いとみなす主観的責任性の段階とに分類した。

ピアジェは、6歳から10歳までの子ども100名ほどにインタビューを行ったところ、客観的責任性の段階から主観的責任性の段階への以降は、およそ7歳ごろに起こり、用いる例話によって違いがあるものの、10歳以降の子どもには客観的責任性は見られなくなることを示した。

これに従えば、6歳以前の子どもは意図よりも結果を重視した判断をするということになるが、だからといって6歳児が意図や動機を理解していないというわけではなく、6歳児で未だ客観的責任性の段階にあると分類された子どもの中にも、意図や動機に言及していた子どもが存在していた。

彼らは、意図や動機に気づいてはいたが最終的に結果の大きさにより注目したのである。

しかしながら、前述のピアジェの研究は、あくまで客観的責任性から主観的責任性への移行期を明らかにすることを目的にしており、意図や動機の理解そのものに焦点が当てられていたわけではなかった。そもそもピアジェは意図と動機の区別を明確に行っておらず、前述の例話に明らかなように、彼の用いた例話は、A と B のどちらもが故意ではなく過失により被害をもたらした状況であった。A は扉を開けるという行為が全く中立的な動機から生じたものであるのに対し、B は母親に黙ってジャムを食べようとするという行為が、よくない動機から生じたものであるという差異はあるものの、意図性の有無そのものについては何ら検討できるものではなかった。

そこで、Armsby (1971) は、故意と過失のストーリーのペアを比較させる方法を用いた。さらに被害の深刻さが子どもの判断に影響を及ぼす可能性を指摘し、6, 8, 10歳児を対象に、故意に1つのカップを割った場合と、(1) 過失で1つのカップを割った場合、(2) 過失で15個のカップを割った場合、(3) 過失で母親の新しい食器をすべて割った場合、(4) 過失で新しいテレビを壊した場合、を比較させた。(1) に関してはほとんどすべての子どもが故意の場合をよりよくないと答えたが、(2) (3) (4) に関しては年齢によって反応に違いが見られた。6～8歳児は被害が深刻になるにつれて過失の場合をよりよくないとみなす反応が多くなった一方で、10歳児は被害の深刻さに関わらず、一貫して故意の場合をよりよくないとみなした。

また、Berg-Cross (1975) は、ピアジェのパラダイムが、2つのストーリーを比較させる方法を用いていたため、年少の子どもは記憶に限界があるため、能力を過小評価している可能性を指摘した。そこで、6～7歳児153名に、意図性（完全な過失から完全な故意への4段階）と結果の大小を組み合わせた8種類の例話の一つずつ提示し、行為者を罰するべきかを5段階で評定させた。その結果、被害の大小に関わらず、完全な過失は最も

低く、完全な故意は最も高く評定された。

これらの結果はいずれも、6 歳児において少なくとも被害がそれほど深刻でない場合には意図を重視した道徳判断を行うことを示している。それではなぜ 6 歳ごろにこのような発達の変化が起こるのであろうか。ピアジェによれば、物質的な結果にもとづく客観的責任性の段階では、判断の基準が子ども自身に内面化されておらず、大人に依拠した外在的なものであるため、この基準に背く程度が物質的に大きい行為の方がより悪いとみなされる。一方、より年長の子どものみられる主観的責任性は、仲間との相互作用が増え大人によるコントロールから解放されることにより、仲間との相互の尊敬や協同に依拠した内在的な基準によって獲得されるものであるという (渡辺, 2000)。

ピアジェの研究は、用いた手法が言語表現のみに頼るものであったため、幼児期の子どもに対して調査を行っていないが、彼は子どもの日常場面の観察から、3 歳ごろに「なぜ〇〇するの?」という形式の問いを多く発するようになるということから、この頃に行為の意図や動機に関して何らかの理解が芽生えることを示唆した (Piaget, 1932)。後に、幼児期の子どもを対象に、言語理解や記憶の負荷を軽減させた方法で、意図と道徳判断の関連を調べる研究が行われている。

Gutkin (1972) は、意図 (よい, 悪い) と被害 (大, 小) を組み合わせた 4 つの例話を一対比較させ、どちらがより悪いかを尋ねた際の子どもの反応を、段階 1: 意図を全く考慮しない段階, 段階 2: 被害の大きさが同じ場合にはじめて意図を考慮する段階, 段階 3: 意図が同じであれば被害を考慮する段階, 段階 4: 意図のみにもとづいて判断する段階の 4 段階に分類した。二宮 (1982) は、4 歳児, 6 歳児, 8 歳児を対象に各年齢の子どもがそれぞれの段階にどれくらい分類されるかを検討したところ、4 歳児では、段階 1 が 50% 程度, 段階 2 が 40% 程度, 段階 3 が 10% 程度であり、段階 4 は見られなかった。また、6 歳児, 8 歳児と年齢に応じて段階が高くなることがわかった。

Nelson (1980) は、3～4 歳児と 6～8 歳児を対象に、意図（よい、悪い）と結果（よい、悪い）を組み合わせた 4 種類のストーリーを、ことばのみで提示する（図なし）条件、吹出しで意図を明示する（図明示）条件、主人公の表情で意図を暗示する（図暗示）条件の 3 条件の道德判断とストーリーの再生課題を行った。その結果、3～4 歳児でも図明示条件では、道德判断に意図情報を利用することがわかった。また再生課題では、意図と結果が矛盾するときには、両者を一致させる再生エラーを起こしやすいことがわかった。

これらの結果は、幼児であっても条件によっては意図を考慮した道德判断ができるということが示している。

3. 3 歳児に故意と過失の区別は可能か

そもそも故意と過失を区別することはいつごろから可能になるのだろうか。Yuill (1984) は、従来の道德判断課題には、意図の弁別に加えて、意図と結果のどちらを重視するかという価値判断が含まれているため、純粋な意図弁別能力を過小評価しているという可能性を指摘し、道德判断に加えて、行為者の満足度の評定を用いて意図理解を検討した。3, 5, 7 歳児を対象に、結果が意図に一致する場合（例、ボールを相手にぶつけようとして実際にぶつける）、結果が意図に一致しない場合（例、ボールを相手にぶつけようとするが相手が受け取ったため実際にはぶつからない）、相手が異なる場合（例、ボールを P 児にぶつけようとするが誤って Q 児にぶつけてしまう）の 3 条件を設定し、意図（中立、悪い）との組み合わせによって、行為者の満足度評定がどのように異なるかを調べた。その結果、意図が中立である場合には、3 歳児でさえも意図と結果が一致している方が行為者の満足度が高いと判断した。しかしながら、悪い意図のときにも、意図と結果が一致している方が行為者の満足度が高いと判断したのは 7 歳児のみであった。なぜ幼児にとって、悪い意図のときには満足度の評定が難しかったのであろうか。

Zelazo, Helwig & Lau (1996) は、3 歳児が意図と結果を統合することが難しいのは、一般的認知能力の制約、つまり 2 種類の情報が与えられると、一方の情報の方に焦点化してしまうという傾向があるからであると指摘した。そこで Zelazo ら (1996) は、3, 4, 5 歳児を対象に、意図と結果の標準的關係 (例、たたかれると悲しむ動物を飼った主人公) と非標準的關係 (例、たたかれると喜ぶ動物を飼った主人公) において、ポジティブな意図を持つ場合とネガティブな意図をもつ場合の主人公の行為予測をさせた。その結果、3 歳児は非標準的關係において行為の予測が困難であった一方で、5 歳児は非標準的關係においても行為を正しく予測することが出来た。つまり 3 歳児にとって、「たたかれるとうれしい」という非標準的關係を保持するという記憶の負荷がある状態で、意図と結果という 2 種類の情報を統合させることは難しかったということである。

ここから Yuill (1984) の結果を解釈しなおすと、幼児にとって、他者の意図は中立、あるいはよいのが標準的な状態であって、このときは結果のみを考慮して解釈すればよかったのに対し、悪い意図のときには、意図情報と結果情報を統合して解釈しなければならず、認知的負荷が高かったのではないであろうか。

4. 故意と過失を区別する手がかり

上記の解釈が正しいとすれば、幼児にとって過失状況よりも故意状況の方が状況の認知が難しく、正しく認知するためにはより多くの手がかりを必要とするのではないであろうか。この点を検討するために、先行研究において、故意と過失の例話がそれぞれどのように記述されていたかを示す (Table 1)。

Nelson (1980) は、意図の記述を次のように行っている。過失の場合は、「彼は友達と一緒にキャッチボールをしようと、…」と意図のみが述べられているのに対し、故意の場合は、「わざと (on purpose)」という直接的な表現を用いると同時に、相手に対して「怒っていた」という感情に関する情

Table 1. 各研究における例話

	故意	過失
Nelson (1980)	He was very <u>mad</u> at his friend that day. He wanted to throw the ball at his friend so he could hit him <u>on purpose</u> the ball hit his friend on the head and made him cry.	He wanted to throw the ball to his friend so they could play catch together with the ball. ...the ball hit his friend on the head and made him cry.
Yuill (1984)* ¹	He wanted to throw the ball at him on the head. ...it hit the boy on the head and made him cry.	He wanted to throw the ball to the boy, so that he could play catch. ...the boy caught the ball and was happy to play with it.
Zelazo, Helwig, & Lau (1996)* ²	...it doesn't like to be hit... cries. ...Sally is <u>nice</u> . She doesn't hurt anyone.	when you hit it, it hurts and it

*¹ Yuill (1984) では、図版を見せて子どもにストーリーを説明させており、上記は正しいストーリーの例として示されていたものである。

*² Zelazo ら (1996) は、意図と結果の関係性と意図情報が与えられ、行為を予測する課題である。

報を提示している。さらに、これらの例話をことばのみで提示する（図なし）条件、吹出しで意図を明示する（図明示）条件、主人公の表情で意図を暗示する（図暗示）条件の3条件を設定している（Figure 1）。

Yuill (1984) の用いた方法は、意図、行為、結果を示す3枚の図版を用いて例話を提示し、実験者が内容を説明するのではなく、子どもに絵を見せて、何が起こっているかを話させる、というものであった。意図は結果の図版

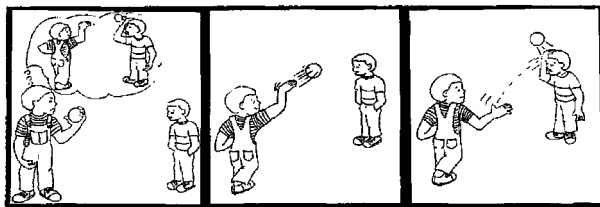


Figure 1. 故意により相手にボールをぶつけた例話（図明示条件）
(Nelson, 1980)

を縮小したものを主人公の考えていることとして吹出しに描いた (Figure 1 とほぼ同じ図版を使用)。正しいストーリーの例としてあげられていたものは、「頭にボールをぶつけたかった」「キャッチボールをしたかった」という欲求に関する記述であった。

Zelazo ら (1996) は、主人公の行為予測をさせる課題であったため、ストーリー中に故意と過失の区別はしていないが、意図情報として、主人公は「よい子 (悪い子) である」という記述を行っている。つまり、よい子、悪い子、といった特性に関する情報を意図として提示しているのである。

ここから、故意と過失の提示の仕方がそもそも研究者間で一致していない、ということがわかるが、まず注目すべき点は、Nelson (1980) のみが故意に関する直接的な表現である「わざと」ということばを用いていることである。子どもの日常会話の中に、「わざと」ということばが見られ始めるのは、早くて 2 歳ごろであり、3～4 歳ごろには、自分の行為がよくない結果を引き起こした事態に対して、「わざとではない」という弁解をするようになるというという観察結果が得られている (Dunn, 1991)。しかしながら、例話の中の、「わざと」ということばの意味を理解しない反応が 5 歳児においても見られた (鈴木・子安・安, 2004) ことから、「わざと」ということばの理解に関してはさらなる検討が必要である。

しかしながら日常生活では、行為者が「わざと」したのかどうか事前にことばで明示されることはめったにない。それでは、例話の中で意図情報に注目させるためにどのような手がかりが用いられていたのであろうか。

1 点目に、Yuill (1984) の例話に見られた、「○○しようとして」または「○○したくて」という意図や欲求に関する記述があげられる。「(これから) ○○しよう」といった意図に関する発言が見られるのは 2 歳児からであるが、3 歳ごろの子どもは意図と欲求が未分化な状態であるという。欲求は結果が達成されさえすれば充足されるのに対し、意図は結果を達成する行為を意図自体が引き起こすときにのみ実行される。3 歳児はこのことを理解できておらず、目標と結果が一致すれば行為者は満足すると考える。

例えば、Astington (1993) は、パンくずをまいた場合と落とした場合で、どちらが鳥にパンくずを食べさせるつもりだったのかを尋ねたところ、3歳児は正しく区別できなかったが、5歳児は正しく区別できた。これは行為の目標（パンくずを食べさせようとして）が明示的に述べられていなかったため、欲求と結果が一致するかどうかを判断することが難しかったからではないかと考察されている。

しかしながら、このことは逆に欲求と結果が一致していることを明確に示せば故意であることが3歳児にも理解できる、ということであり、この点は Nelson (1980) が吹出して欲求を明確に図示したときに3歳児の成績が向上したという結果からも説明できる。

2点目に、Nelson (1980) の例話に見られた、行為時の感情に関する手がかりがあげられる。一般的に、「うれしい」「悲しい」「怒った」「怖い」といった感情状態を表すことばが現れるのは2歳ごろであり (Bretherto & Beeghly, 1982)、望ましい結果が得られればうれしく、望ましくない結果が回避できなかった場合に悲しみや怒りを感じるということは3歳児でも理解できていた (Stein & Levine, 1989)。しかしながら、例えば怒りの感情が故意に危害を加えることに結びつく、という認識を幼児がしているかについては検討されていないが、感情は相手の表情や言動からも推測することが容易であり、故意と過失を弁別する手がかりとして利用される可能性がある。

3点目に、Zelazo ら (1996) で見られた、「よい子である」というような特性に関する手がかりがあげられる。「親切的な」「意地悪な」といった特性用語の使用は3歳ごろから見られ (Ridgeway, Waters & Kuczaj, 1985)、性格特性が特定の動機を生み出し、それが行動につながるという因果関係を確実に理解できるのは5歳ごろである (清水, 2000)。

以上から予想される幼児の道徳判断のプロセスを図示したものが Figure 2 である。幼児は行為者の感情や性格特性に関する情報から行為者の欲求を推測し、それと観察された結果を比較することにより、故意か過失かの

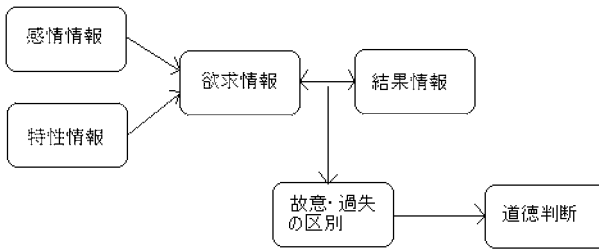


Figure 2. 予想される幼児の道德判断のプロセス

区別を行い、そこから行為の道德性（善悪）の判断を行うのではないであろうか。

5. まとめと展望

本論文は、故意状況と過失状況における幼児の道德判断に関する先行研究を概観し、幼児が道德判断において意図を考慮ようになる発達プロセスを検討したものであった。さらに幼児が意図情報を考慮する際の難しさを考察し、意図情報に注目させるための手がかりをあげた。

今後の課題として次の2点をあげる。1点目は、故意と過失の区別に関して、本文中で述べたように、年少の幼児にとって、過失よりも故意の方が難しくより多くの手がかりを必要とするのではないかという仮説が正しいのかどうかを検証することである。この点について、例えば Yuill (1984) が行ったように、故意と過失の例話を図版で提示し、幼児にストーリーを話してもらう、という方法が有効であると考えられるが、Yuill (1984) は、「ほとんどの子どもが自発的に正しいストーリーを話した」と述べるにとどまり、発話に関する分析を行っていない。しかしながら、3歳児は吹き出しで図示された表象内容を正しく語るができない（高畠, 2002）という結果も得られており、子どもの発話を分析することにより、故意と過失の区別に関して新たな知見が得られる可能性がある。

2点目は、子どもがどのような手がかりから故意か過失かを判断するの

か、そこからどのような道德判断を下すのか、といった一連のプロセス (Figure 2) を検証するための実証的研究を行うことである。

文 献

- Armsby, R.E. (1971). A reexamination of the development of moral judgments in children. *Child Development*, **42**, 1241–1248.
- Astington, J.W. (1993). *The child's discovery of the mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (アスティントン, J.W. 松村暢隆 (訳) 子供はどのように心を発見するか：心の理論の発達心理学. 新曜社)
- Berg-Cross, L.G. (1975). Intentionality, degree of damage, and moral judgments. *Child Development*, **46**, 970–974.
- Bretherton, I. & Beeghly, M. (1982). Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, **18**, 906–921.
- Dunn, J. (1991). Young children's understanding of other people: Evidence from observations within the family. In Frye, D. & Moore, C. (Eds.) *Children's theory of mind: mental states and social understanding*. (pp. 97–114.) Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Gutkin, D.C. (1972). The effect of systematic story changes on intentionality in children's moral judgments. *Child Development*, **43**, 187–195.
- Helwig, C.C., Zelazo, P.D., & Wilson, M. (2001). Children's Judgment of Psychological Harm in Normal and Noncanonical Situations. *Child Development*, **72**, 66–81.
- Nelson, S.A. (1980). Factors influencing young children's use of motives and outcomes as moral criteria. *Child Development*, **51**, 823–829.
- 二宮克美 (1982). 児童の道德的判断の発達に関する研究—Gutkin の4段階仮説の発達同時性の検討—. 教育心理学研究, **30**, 282–286.
- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York: Harcourt, Brace. (ピアジェ, J. 大伴 茂 (訳) (1956). 児童道德判断の発達 同文書院)
- Ridgeway, D., Waters, E., & Kuczaj, S.A. (1985). Acquisition of emotion-descriptive language: Receptive and productive vocabulary norms for ages 18 months to 6 years. *Developmental Psychology*, **21**, 901–908.
- 清水由紀 (2000). 幼児における特性推論の発達—特性・動機・行動の因果関係の理解—. 教育心理学研究, **48**, 255–274.
- Stein, N.L. & Levine, L.J. (1989). The causal organization of emotional knowledge.: *A developmental study. Cognition and Emotion*, **3**, 343–378.
- 鈴木亜由美・子安増生・安 寧 (2004). 幼児期における他者の意図理解と社会的問

- 題解決能力の発達：「心の理論」との関連から．発達心理学研究, **15**, 292-301.
- 高嶋眞知子 (2002)．幼児における吹出しによる表象理解の発達．発達心理学研究, **13**, 136-146.
- 外山みどり (2005)．責任の帰属と法．菅原郁夫・サトウタツヤ・黒沢香 (編) 法と心理学のフロンティア I 理論・制度編．北大路書房．
- Yuill, N. (1984)．Young children's coordination of motive and outcome in judgments of satisfaction and morality. *British Journal of Developmental Psychology*, **2**, 73-81.
- Zelazo, P.D., Helwig, C.C., Lau, A. (1996)．Intention, Act, and Outcome in Behavioral Prediction and Moral Judgment. *Child Development*, **67**, 2478-2492.
- 渡辺弥生 (2000)．道徳性の発達．堀野緑・濱口佳和・宮下一博 (編) 子どものパーソナリティと社会性の発達．北大路書房．

Abstract

Use of Intent Information in Moral Judgments of Young Children

Ayumi Suzuki

Contrary to the traditional work of Piaget, recent research has shown that young children, even 3-year olds, take intent information into account in moral judgments. This paper reviews research on the moral judgments of intentional and accidental harm and discusses the developmental process of considering intent information in the moral judgments of young children. The cause underlying the difficulty young children experience in focusing on intent information is explained, and ways to encourage them to focus on intent information are presented. In addition, further research ideas are proposed.